長根窯跡群

II

昭和47年 3 月

涌谷町教育委員会

序　　文

昭和45年12月16日，国指定史跡「長根貝塚」より東へ約１kmの地点において，町道小里長根線道路新設工事作業中に現場より８世紀はじめのものと推定される須恵器の窯跡を発見したことは、昭和46年２月，涌谷町教育委員会発行の調査概報「長根窯跡」をもってすでに御報告申し上げておるところでございます。

この遺跡は全国遺跡台帳にも登載されていないものであり，東北古代史にとって極めて重要な問題を提起するものであります。

涌谷町教育委員会はこの遺跡のもつ歴史的意義を解明するため，宮城県多賀城跡調査研究所長岡田茂弘氏に調査の指導をお願いし，宮城県古川高等学校教諭佐々木茂楨氏および宮城県多賀城跡調査研究所技師桑原滋郎氏を担当者として，昨年８月に発掘調査を実施いたしました。

ここにその調査結果がまとまりましたので，集大成のうえ，報告書として発行することにいたしました。学術資料として御活用いただければ幸いと存じます。

尚，本報告書を発行するにあたり，御援助をいただきました関係者の各位，とくに宮城県教育庁文化財保護室調査係長志間泰治氏をはじめ，宮城県多賀城跡調査研究所の所員の方々および宮城県古川高等学校郷土研究部の諸君にたいし，厚く御礼申し上げる次第でございます。

昭和47年３月

涌谷町教育委員会
教育長　百　々　六　郎

宮城県遠田郡涌谷町小里
長根窯跡群調査報告書

岡　田　茂　弘
佐々木　茂　楨
桑　原　滋　郎

目　　次

序　涌谷町教育委員会教育長　百々　六郎
Ⅰ　窯跡群の位置と現状……1
Ⅱ　発見の経過……2
Ⅲ　調査の経過……3
Ⅳ　A地点1号窯跡……5
Ⅴ　B地点1号窯跡……8
Ⅵ　C地点1号窯跡……10
Ⅶ　D・E・F・G地点の窯跡群の遺物……12
Ⅷ　考　　察……13

図版目次

図版1　長根窯跡群付近航空写真
〃2　a　長根窯跡群遠景　b　発掘地区全景　c　A地点1号窯跡
〃3　a　B地点1号窯跡　b　須恵器出土状況
〃4　a　C地点1号窯跡　b　須恵器出土状況
〃5　A地点1号窯跡出土須恵器
〃6　A地点1号窯跡出土須恵器
〃7　B地点1号窯跡出土須恵器
〃8　甕　叩　目

挿図目次

第1図　宮城県北部の古代窯跡……1
〃2〃　長根窯跡群地形図……2
〃3〃　発掘調査地区地形実測図……4
〃4〃　A地点1号窯跡実測図……5
〃5〃　A地点1号窯跡出土須恵器実測図……6
〃6〃　B地点1号窯跡実測図……8
〃7〃　B地点1号窯跡出土須恵器実測図……9
〃8〃　C地点1号窯跡実測図……11
〃9〃　C地点1号窯跡出土須恵器実測図……12
〃10〃　E，F地点の須恵器実測図……13
〃11〃　ヘラ切り非再調整の杯の2つのタイプ……15

本書に掲載の空中写真は国土地理院長の承認を得て2万分の1空中写真を復製したものである。承認番号　昭47　6592号

Ⅰ　窯跡群の位置と現状

長根窯跡群は，宮城県遠田郡涌谷町小里字長根南の地内に存在する。この地は，国鉄石巻線涌谷駅の北方約７kmの地にあたる。涌谷町の中心から県道仙台―気仙沼線によって箆岳丘陵北麓の小里部落付近に達すると，水田地帯をへだてて約1.2km北方に長根丘陵を望むことができる。長根丘陵は遠田郡田尻町の大貫丘陵から東へのびた幅約400ｍ，延長約5kmほどの細長い丘陵で，砂礫ないし粘土を主体とした新第三紀鮮新世の地層で構成されており，丘陵上の標高は20ｍ前後である。

長根窯跡群は，この丘陵の南斜面に位置し，東西約250ｍの範囲にわたって７カ所の地点に分布している。発見の順序に従がってＡからＧまでの地点名称を付したが，後述のようにＡ～Ｃの３地点の窯跡各１基について，発掘調査を実施した。以下に各地点の位置を記すことにする。

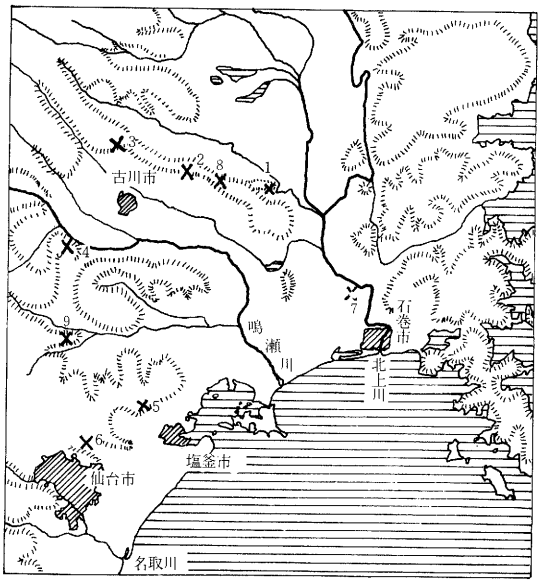
Ａ地点　涌谷町小里字長根南79の２番地の大川直行氏所有の草地にある。この地点は長根丘陵南斜面の中腹にあたり，窯跡の海抜高度は17ｍ前後である。Ａ地点では１基の窯跡の存在が知られているが，これは後述するように町道新設改良工事の際に発見されたもので，長根窯跡群が発見される契機となったものである。

Ｂ地点　涌谷町小里字長根南87の１番地の大友近氏所有の畑地内にあたる。この地点の窯跡も１基発見されており，これは農道ののり面に窯体がかかっていた。

Ｃ地点　涌谷町小里字長根南87の２番地の門間吉雄氏所有の豆畑にある。Ｂ地点と極めて近い位置にあり，丘陵の裾部に近い標高７ｍ位の南斜面に窯跡が構築されている。発掘調査したのは１基であるが，他に数基存在すると予想される。

Ｄ地点　涌谷町小里字長根南79番地の大川直行氏の宅地内にあり，母屋の西側に近いところである。母屋建設のため長根丘陵南斜面の裾部を削平した際，大川直衛氏によると，須恵器壺や甕の破片等が出土したという。現状では窯跡の存在を示す遺構が全くみられないので，煙滅したものと考えられる。

Ｅ地点　涌谷町小里字長根南77番地の木村治氏所有の畑地内にある。長根窯跡群の最西端にあたり，Ｄ地点の西方に，長根丘陵に直交状に入る別の谷があるが，Ｅ地点の窯跡はこの谷の西斜面に窯体を東に向けて構築されている。窯のすぐ上を農道がこの谷に並行して通っているが，その直下の柿の木の生えている付近にスサ入り粘土の



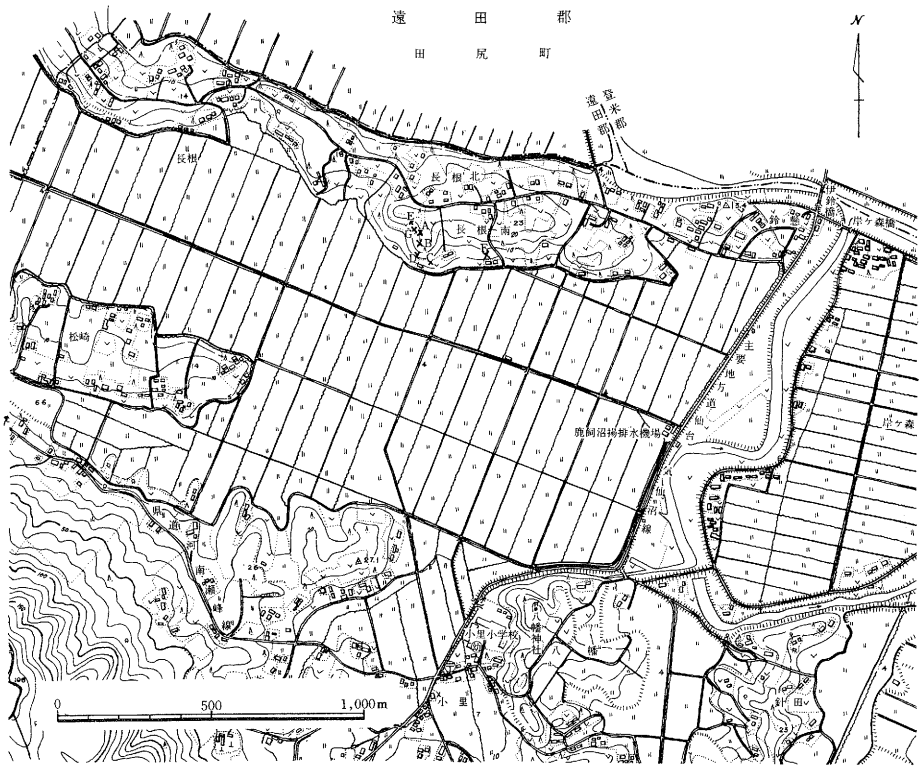
第１図　宮城県北部の古代窯跡

1．長根窯跡群　2．木戸窯跡群　3．大吉山窯跡群
4．日の出山窯跡群　5．春日大沢窯跡群　6．台の原、小田原窯跡群
7．須江窯跡群　8．北長根窯跡群　9．島屋窯跡群

窯壁と共に須恵器が散布している。

F地点　涌谷町小里字長根南115番地の伊藤俊雄氏所有の畑地内にある。長根窯跡群の最東端にあたる。伊藤氏の母屋の裏手であるが，伊藤氏の宅地もD地点の大川氏宅と同様に丘陵南斜面の裾部に造成されているため，C－1号窯跡の高さを考慮に入れると，窯跡は造成工事で影響を受けているかも知れない。

G地点　涌谷町小里字長根南79の1番地の木村直躬氏の所有地で，現状は墓地となっている。E地点とは間に谷をはさんで相対する位置にあたっており，墓地の一角にスサ入り粘土の窯壁体が確認されている。



第2図　長根窯跡群地形図

II　発見の経過

長根窯跡群の存在が広く知られるようになった契機は，A地点の窯跡の発見によるものである。そこでいま，その経過を記すと次のようなことになる。

涌谷町は，昭和45年の12月3日より，涌谷町小里字長根南79の2番地内を通る町道小里長根道路新設改良工事を施工した。A窯跡は，その作業に従事していたブルドーザーが丘陵南斜面を掘削したところ偶然に土器が出土したことをきっかけとして発見されたものである。

昭和45年12月17日　土器発見の報により，直ちに宮城県涌谷町教育委員会社会教育課長山本泰一および宮城県古川高等学校教諭佐々木茂楨らが現地踏査を行なったところ，土器

の破片とともにスサ入り窯壁の断片が散乱しているところから，土器の出土は窯跡の破壊に伴うものであることを確認した。窯跡はすでに大部分が破壊されていたが，付近に散乱していた遺物を一見すると，器形・製作手法ともに極めて古い要素をもつものと思われた。ついで12月20に，宮城県多賀城跡調査研究所技師桑原滋郎・同平川南・同進藤秋輝と佐々木茂楨は，再度現地調査を行ない，窯跡の一部分がなお残存していることを確認するとともに，出土土器の収集整理につとめた。

その結果，窯跡についての発掘調査は後日をまつことにし，その段階でのまとめを主に土器について行なった。それが昭和46年２月に涌谷町教育委員会が発行した報告書『長根窯跡』である。

III　調査の経過

A地点で窯跡が発見され，その出土品が学術上きわめて貴重なものであることが報告された結果，長根窯跡に対する関心はとみに各方面で高まった。これを背景にした涌谷町教育委員会・同文化財保護委員会では，昭和46年４月，遺跡を顕彰しあわせて保存対策をたてるための発掘調査を年度事業の１つとすることを決定し，その調査を再びわれわれに依頼された。

昭和46年７月11日，宮城県多賀城跡調査研究所岡田茂弘・桑原滋郎・進藤秋輝・西脇俊郎・高野芳宏および宮城県古川高等学校佐々木茂楨が，発掘予定地の予備踏査を行なったところ，A地点の窯の焼成室の煙道部は工事による破壊をまぬがれて遺存していることが観察された。

また，A地点周辺の谷の斜面ごとに，やや広く土器片や窯壁体の残片にもとづく分布調査とボーリング調査を行なったところ，予想外に範囲が広がり少くともさらに５地点に窯跡が存在することをつきとめ，これらが「長根窯跡群」をなすことを確認した。その後，佐々木茂楨と桑原滋郎が再度分布調査を行なった際に，さらに１地点を加えることができた。これらを合せた７地点の所在位置と現状については，すでにのべたので省略する。

その際に確かめた地点のうち，B地点は道路ののり面に窯体の一部がかかって破壊されるおそれがあり，C地点についても，窯壁の断片が散乱し耕作によって遺構の原状がこわされる心配が大いに認められた。

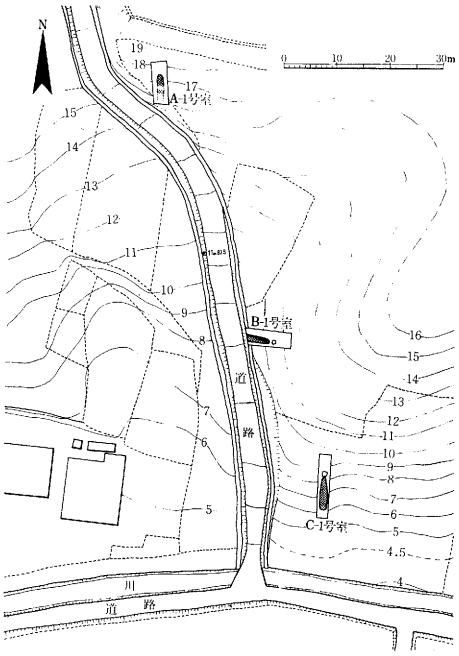
このため，長根丘陵における窯業生産形態の一端を明らかにするため，緊急を要するA～Cの３地点を選んで発掘を行なう計画をたてた。

かくして，１カ月の後所定の手続も完了したので，昭和46年８月10日より約10日間の予定で，つぎの組織により発掘調査を実施した。

調査主体　涌谷町教育委員会
調査指導者　宮城県多賀城跡調査研究所長　岡田茂弘
調査担当者　宮城県古川高等学校教諭　佐々木茂楨
　　宮城県多賀城跡調査研究所技師　桑原滋郎
調査参加者　宮城県多賀城跡調査研究所技師　工藤雅樹・進藤秋輝・平川南・西脇俊郎
　　所員　高野芳宏・古泉弘・小松正夫・野崎準・清野洋子
　　宮城県古川高等学校郷土研究部員

早坂光博・鈴木均・新沼秀二・後藤正彦・大友徹郎・有路俊昭・小川邦博・青木景朝・角田俊晃・鈴木覚・角田裕史・大泉孝夫・桜井俊一浅野盛夫・笠松浩太郎・佐々木修

調査協力者　大川直衛・大川直行・大友近・門間吉雄



第３図　発掘調査地区地形実測図

８月９日午後に，発掘調査用資材の運搬を行ない，翌10日に各窯跡のほぼ中央を縦断する基線を設けて地区割りをおこない，発掘を開始した。まず表土を除去したところ，それぞれの地点において須恵器片および窯壁・木炭まじりの黒色土が１カ所づつ存在していることが認められた。そのため，これを各地点にわけてＡ―１号窯跡，Ｂ―１号窯跡，Ｃ―１号窯跡と名づけた。

ついで，窯跡内の堆積土の除去および床面の清掃を行ない遺構の検出につとめたところ，12日までには，Ｂ―１号窯跡およびＣ－１号窯跡において，ヘラ切りで再調整を行なわない技法の須恵器杯等を検出し，これらがＡ―１号窯跡出土の須恵器よりも新しい時期の窯によって生産されたものであることが確かめられた。ひきつづき各窯跡については写真撮影を行なったのち，15～16の両日に遣り方を設定して遺構の実側を行なった。

この間，８月12日の午後には，地元住民を対象とする現地説明会を開催して遺跡の顕彰につとめる一方，調査の成果を岡田茂弘から報道関係者に発表し，長根窯跡群の学術的価値と保存の意義について普及につとめた。

こうして予定した調査は，補足調査もふくめて18日には終了したので，ひきつづいて19日に埋戻作業を実施して，ここに調査の全行程を終えることができた。

なお，今回の調査にあたっては，Ａ・Ｂ・Ｃ３地点の土地所有者の方々をはじめ，地元長根部落の大勢の方々の献身的な協力を受けたことを忘れることができない。ここに報告書を成すにあたり，心から感謝の意を表したい。

Ⅳ　A地点1号窯跡

1．発見遺構（図版2－c　第4図）

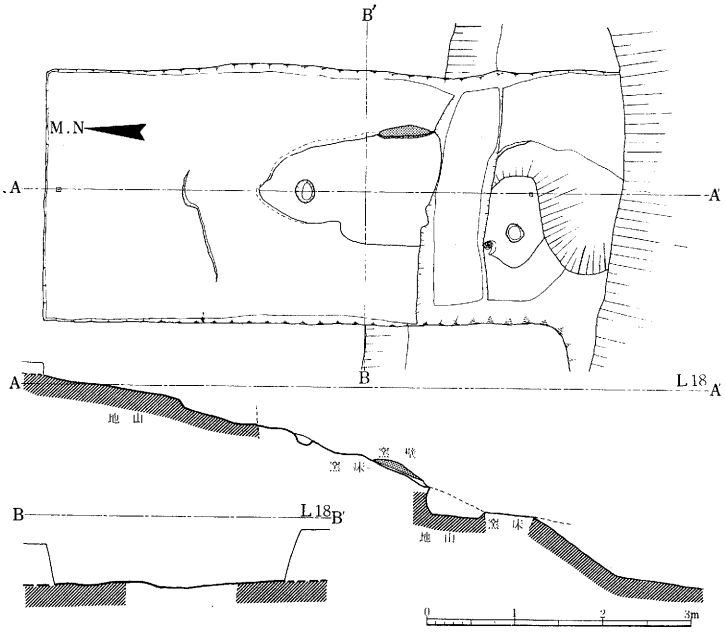
丘陵南斜面の中腹にある。先年度報告した通り，窯体の下半と灰原は，町道工事のブルドーザアーにより破壊されており，焼成部の上半 3.2mを残すのみである。窯体主軸線はほぼ磁北と一致する。残存している焼成部は，赤褐色の酸化層の床面と，高さ10cm，長さ約50cmの東側窯壁である。最大巾は 1.2mほどで，奥へゆくに従って，狭まっている。現存する壁面には，スサ入り粘土を貼りつけてはいないが，地形等からみて，半地下式と考えられる。床面は約20°の傾斜をもっている。上端から 2.6mの所で傾斜がゆるくなっている。

2．出土遺物（図版5・6　第5図）

すべて須恵器である。器形には，杯・蓋・盤・長頸瓶・甕などがある。先年の報告ですでに述べたが，ここでその一部を再録する。なお先に甕も，共に出土していると記したが，今回の発掘調査でB地点1号窯が発見され，甕の一部はそちらの出土品と考えられるにいたった。器質はやや軟質である。胎土は小砂粒を含んでいるが，さして粗くはない。調整のロクロはすべて右まわりである。

杯Ⅰ（図版5－a～d　第5図1～5）

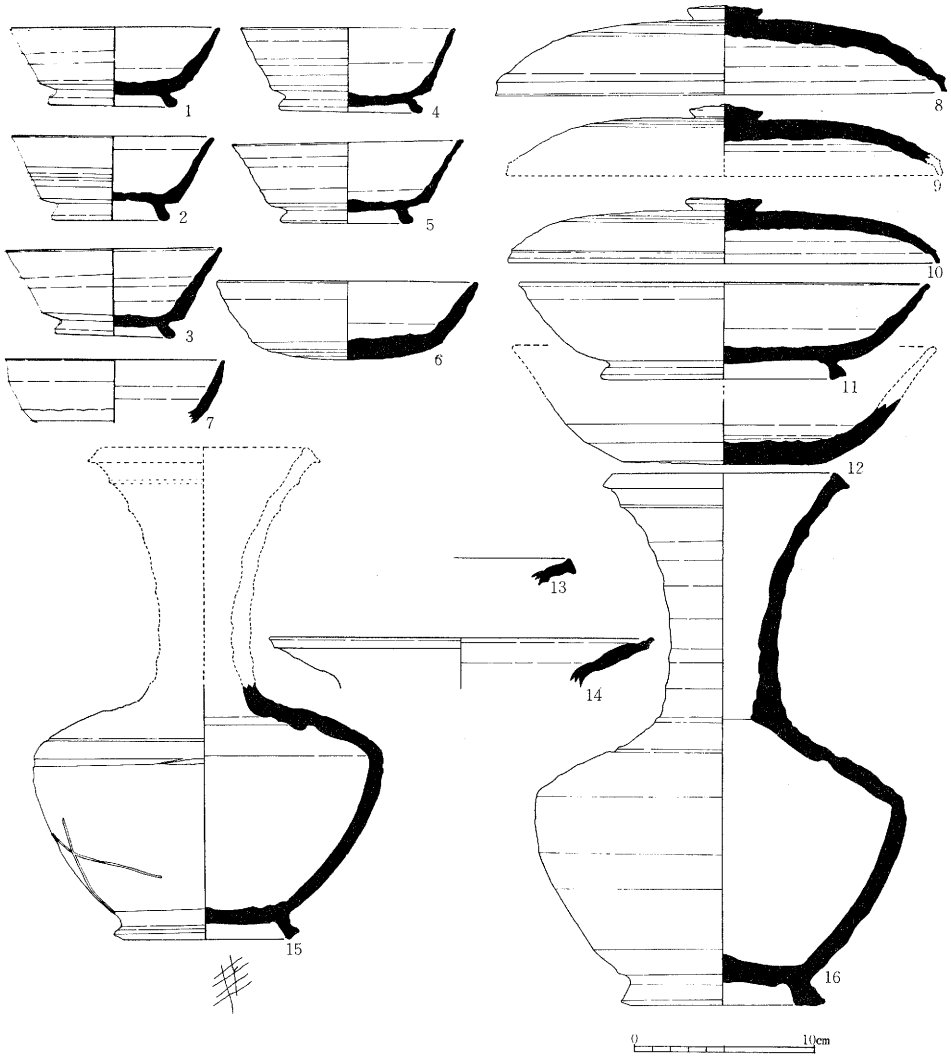
口径12cm，高さ 4.5cm内外，底径は 8.3cm前後で，底部には，径 7.5cm内外で高さ1cm弱の高台が付く。体部と口縁部は，外上方に直線的にのび，口縁端部はまるくおさめる。底部には，やや丸底風のものと，ほぼ平らなものとがある。体部と底部の境界は削り再調整により明瞭な稜をなしている。高台は杯底部周縁より1cm弱内側に付けられ，割合厚く外方にふんばり，先端はやや肥厚して丸くおさめている。器面内外はロクロ調整されている。外面の体部下半から，底部の全面にわたって，丁寧な回転ヘラ削りの再調整を行い，その後高台を付着している。多くは，回転ヘラ削り調整のため，その前段階のロクロからの離し方を知りえないが，一例のみであるが，底部の削り残しの部分に，ヘラ切りの痕跡をとどめている資料がある。



第4図　A地点1号窯跡実測図

杯II（図版５－ｆ　第５図11）

口径22.3cm，高さ 5.4cmの大きさをもち，杯としてはやや大き目である。体部は底部から丸味をもって，わずかに内湾気味に立ちあがり，なかばからやや外反気味に外上方にひろがり丸くおさめた口縁端部にいたる。体部は浅目で体部と底部の境界はさして明瞭ではない。高台は径14cm弱で下方はやや肥厚して外方にふんばる。高台端面は，わずかに外上方にむき，中凹みである。体部は，ロクロ調整され，底部は回転ヘラ削りの再調整を行ない，底部より小さめの高台を付着する。内面底部中央付近に，巾１mmほどの沈線がひかれているものがある。或はヘラ記号であるかも知れない。



第５図　A地点１号窯跡出土須恵器実測図

杯III（第５図６）

口径14.6cm，高さ 4.4cmのものである。体部は厚目の底部から，ごくわずかに内湾気味に外上方に立ちあがり，口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。底部は平底ではなくゆるい丸底をなし，高台はつかない。体部と底部の境界は，明瞭でない。器面内外は

ロクロ調整の後ロクロからはヘラ切りで離される。底部全面，回転ヘラ削り再調整を行なっているが，わずかの削り残しの部分にヘラ切りの痕跡を留めている。底部には，沈線による×印が刻されている。ヘラ記号かも知れない。

杯Ⅳ（第５図７）

底部を欠く小破片である。体部は杯Ⅰと異なり，やや内湾気味に外上方に立ちあがっており，口縁端部は丸くおさめている。高台がつくかどうかはわからない。口径12.4cm，底径 9.3cmほどかと推定される。

盤（第５図12）

体部下半から底部にかけての破片であり，全体の形はわからない。体部は径11.6cmの底部からゆるく内湾しつつ外上方に立ちあがる。高台は付かない。杯Ⅱにくらべて厚目であり，杯Ⅱよりもやや深い器形であろうとおもわれる。体部下半から底部全面にかけて，回転ヘラ削りの再調整を行なっている。

蓋（図版５－ｅ　第５図８～10）

直径約24.5cm，高さ約 4.5cmのものである。天井部はなだらかな丸味をもって，口縁部にいたる。口縁部はわずかにおりまげるがやや外方をむいている。口縁端部はまるくおさめる。天井部中央にはかなり偏平なつまみがつく。つまみは偏平であるが，なお宝珠形のおもかげをとどめている。口縁部内面にかえりはつかない。天井部上半は回転ヘラ削り再調整をした後，つまみを付着する。この蓋は杯Ⅱとセットになるものと考えられる。

長頸瓶（図版６　第５図15・16）

ほぼ完全なもの（図版６－ａ）と頸部を欠くもの（図版６－ｂ）とがある。第５図16は高さ29.7cm，口径13.6cm，体部径20.7cmである。口径部は細長く，上方に外反しつつのびる。口縁端部は，斜下方に短かくつまみだされて鈍い稜をなす。口縁端部の下方１cmほどのところに，１条の隆線があるのが特徴である。ほぼ直線的な肩部は，鋭く屈曲し胴部から底部にいたる。底部には厚い，外方にふんばった高台がつく。高台の端面はほぼ水平で，外周部がやや上方をむく。胴部から底部にかけて，回転ヘラ削り調整をし，その後高台を付着する。体部と頸部の接合は３段構成であろう。第５図15は，頸部を欠くものである。やや内湾気味の肩部が鋭角に屈曲し，胴部，底部にいたる。肩部と胴部の境界の屈曲部分に太目の沈線が１条めぐる。高台は16とややことなり，さして厚くなく，垂直に短くのびて端部が外方に屈曲する。高台の端面は，外上方に向いている。胴部から底部にかけて，回転ヘラ削りの再調整を行ない，その後ナデの仕上げを行なっており，ナデの重複する状態が観察される。頸部と体部の接合は３段構成である。胴部に２ヵ所と底部外面に１ヵ所ヘラ記号かと思われるものがある。胴部のものは×印で巾１mm弱の沈線であり，底部のそれは針先で引いたようにごく細い沈線である。

瑔？（第５図13・14）

小破片のため判然としないが，瑔の口縁部破片かと思われる。第５図14は口径21.5cm，第５図13は口径を測定しえない。

この他に波状文のある甕口縁部小破片，体部破片などがある。体部の破片は何れも小破片であるが，厚手，薄手のちがいがある。厚手のものは２cmほどの厚さで，外面には，平行状の叩き目があり，内には円弧状文かと思われるあて道具の痕跡がある。薄

手のものは，外面に平行状叩目，内面に同心円文のもの，外面は平行叩目で内面にあて道具の痕跡のないもの，両面なめらかなものなどがある。

V　B地点1号窯跡

1．発見遺構（図版3　第6図）

A地点1号窯跡の東南約54mにある。この窯も町道工事により，燃焼室の下半と灰原を失っている。窯体主軸線は，磁北の東より約6°30′南に偏している。標高はA地点1号窯より7m低く約10mである。

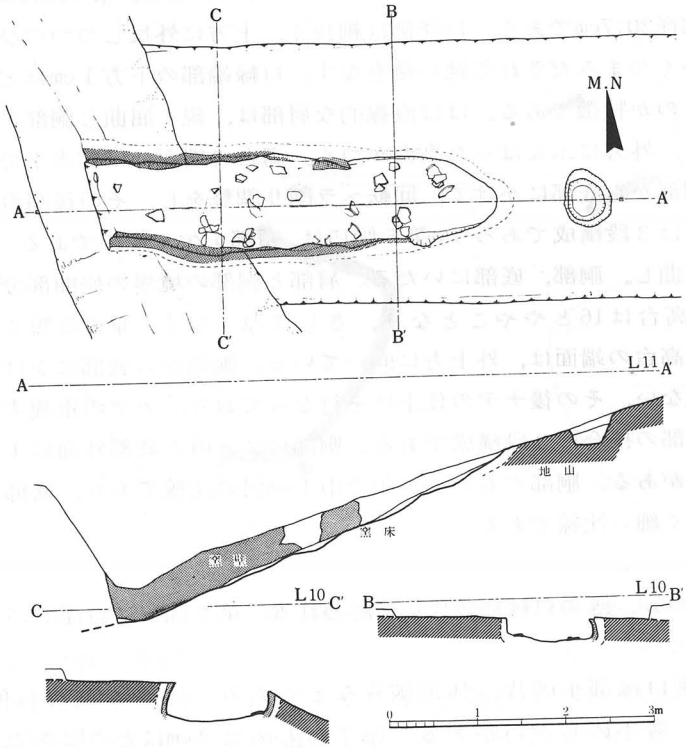
燃焼室は約60cm程残っており，巾は約80cmである。焼成室とは，やや傾斜がことなり，巾もややせまいので，燃焼室とみとめた。床面の角度は約6°である。焼成室は，長さ3.9mで，最大巾は約1mであり，上端近くまで巾はほぼ一定である。深さは最も深いところで40mほどである。床面と壁面は青灰色に堅く焼けしまっているが，上端に近い部分では壁は残っていない。壁面のカーブからみて，高さは1m弱ではないかと思われる。窯中には，スサ入りの窯壁が，落ちこんでおり，半地下式のあな窯であることがわかる。床面の傾斜角度は約24°である。上端のさらに上方約1mの所に，焼土や木炭片がわずかに入りこんだ，直径70cmほどの浅いくぼみがみとめられた。須恵器片が1片発見された。

2．出土遺物（図版7・8－a～f　第7図）

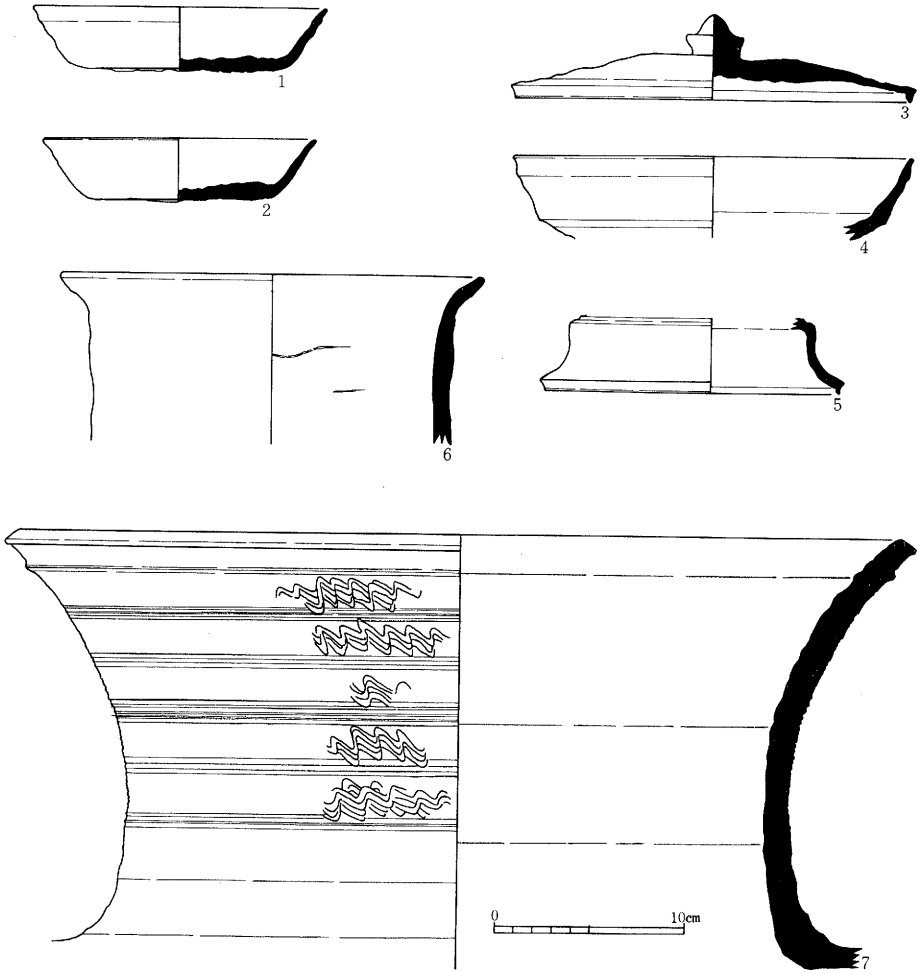
この窯跡からは若干の須恵器が出土したので出土遺物は，短期間のものとみとめられる。床面に重複はみとめられなかった。器形としては，杯蓋・瓶・甕・硯などがある。

杯Ⅰ（図版7－b・c　第7図1・2）

2点出土している。2は直径14.4cm，高さ3.4cm，底径9.3，1は直径15.5cm，高さ3.4cm，底径10cmである。体部は，底部とあまりはっきりした境をなさずに立ちあがり，わずかに外反しつつ口縁部にいたる。浅



第6図　B地点1号窯跡実測図



第７図　Ｂ地点１号窯跡出土須恵器実測図

い感じを与える。口縁端部は１ではまるくおさめているが，２では，端部が，わずかに平らにおさえられている。底部は口径に比して割合大きい。わずかに丸底風である。ロクロからは，ヘラ切りではなされ，再調整は全くない。

杯II（第７図４）

直径約21cmの体部に稜をもつものの小破片がある。高台のつくものであろう。或いは稜椀というべきかも知れない。

蓋（図版７－ａ　第７図4）

直径21.3cm，高さ 4.5cmのものである。天井部中央付近は平らであるが，稜をつくってななめ下方に直線的におおきく広がり，口縁部にいたる。口縁部は，鋭くおりまげられ，やや内方をむいている。天井部には，割合高い宝珠形のつまみが付けられている。

瓶

何れも小破片で，全体の形のわかるものはない。口縁部・頸部・肩部・底部などの破片が数点ある。

甕Ｉ（図版７－ｄ　第７図７）

先年の報告で，A地点1号窯出土としたものである。大型の甕で，口径約48cm，頸部は体部からほぼ直線的に立ちあがり，上半でゆるやかに外反しつつ口縁端部にいたる。口縁端部は，下方にわずかにつまみ出し，丸くおさめている。口縁端部の下方2cm程のところに隆線が1条めぐる。頸部の文様は先にのべた隆線の下方に施されている。それぞれ3ないし4条の沈線で区画した中に，櫛描き波状文を5段にほどこしている。色調は，灰色で部分的に黒灰色又は灰褐色を呈し，器質はかたい。今回の発掘調査で，同類と思われるものの，頸部破片が1点出土している。

甕II

ゆがみがひどく図示しえないが，C地点1号窯出土の甕とほぼ同類のものである。頸部径は約17cmと思われる。体部外面は，平行状の叩目があり，内面には，アテ道具の痕跡があるが，無文である。

甕III（第7図6）

直径22.3cmの大きさである。体部上半と口縁部のみの破片であるが，体部はほぼ直立し，わずかに外反する短い口縁部にいたる。内外面共ロクロ調整されているが，内面には巻上げ痕跡かと思われる割れ目がみられる。色調は茶褐色で，器質はもろい。

これらの他に甕の破片が若干出土している。薄手のものと厚手のものとがある。外面の叩き目文と，内面のあて道具の痕跡とのちがいにより分類すると，いくつかに分けることができる。薄手のものとしては，1外面が平行叩目で，内面は円弧状文のもの，2外面が平行叩目で，内面に痕跡のないもの，3外面が平滑で裏に円弧状文のあるもの，4内外とも平滑なもの，5外面が格子目で，内面が平滑なものなどがあり，厚手のものとしては，1外面が格子目で，内面が平滑なもの，2外面が平行叩目で，内面にあて道具の痕跡があるが無文のもの，3外面が平行叩目で内が平滑なもの，4外面が平滑で，内面に円弧状文のあるもの，5両面平滑なものなどがみられる（図版8－a～f）。

硯（第7図5）

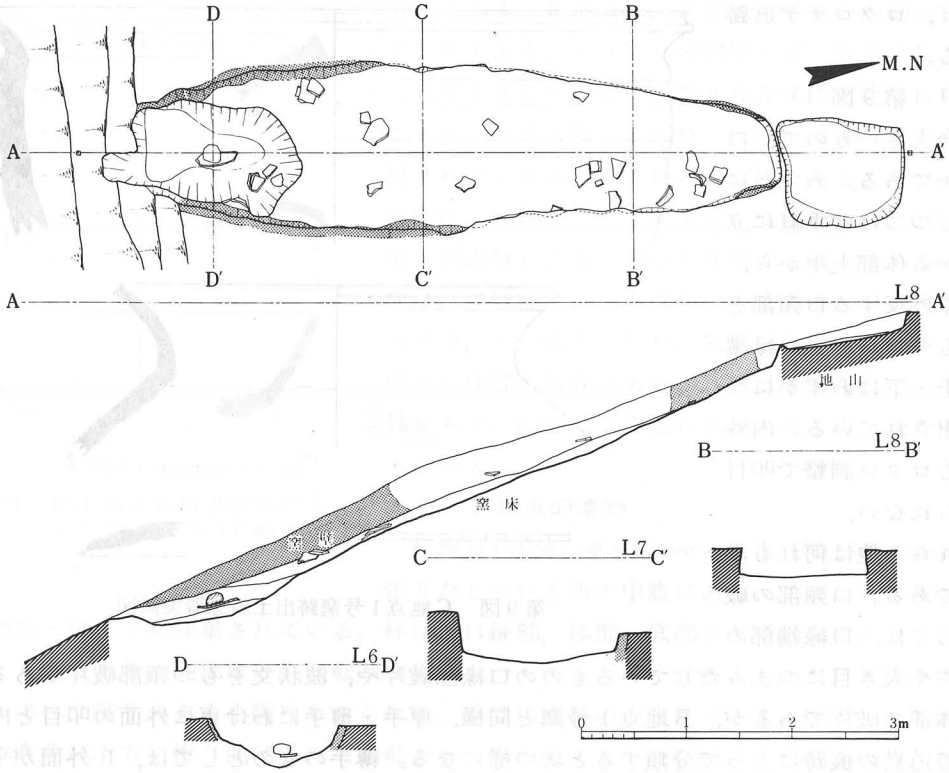
脚部のみの破片1片である。半分近く残っているが，透しなどはみられない。

VI　C地点1号窯跡

1．発見遺構（図版4　第8図）

B地点1号窯の東南約27mの丘陵先端の南斜面の裾近くにある。この窯跡の地下の部分はほぼ完全に遺存していた。ただし灰原は後世の耕作の為か，全くみとめられなかった。窯体主軸線は，磁北に対して11°31′東に偏している。標高はB地点1号窯より2m程低く約8mである。

先にも記した様に，燃焼室も，焼成室も残っていたが，両者を区別するような，壁のせばまりや，床面，窯壁の焼け方の相違などはみとめられなかった。両者をあわせた長さは6.3m，最大巾は上端から3～5mほどにあり，約1.5mである。ただ上端から約4.5mから下方に，わずかながらくぼみがみられる。この部分が燃焼室であるのかも知れない。焼成室床面の角度は22°～24°位である。深さは最も深い所で40cm程残っている。窯壁は，上



第８図　Ｃ地点１号窯跡実測図

端と，下半に良く残っており，半ば崩壊してしまっている。窯壁は青灰色に焼けしまっているが，床面は茶褐色である。窯中には，スサ入りの窯壁が落ちこんでおり，また，地形的にみても半地下式であることがわかる。窯体の上端に接して，その上に南北 1.2m，東西1.0mほどの不整方形の浅い凹みがみとめられた。 Ｂ地点１号窯上方の浅いピットと同様，焼土や木炭混りの黒色土がつまっていた。

２．出土遺物（図版８－g～l　第９図）

出土したものはすべて須恵器であるが，あまり多くはない。Ｂ地点１号窯同様，床面に重複はみとめられなかったので，出土遺物は短期間のものと考えられる。器形としては蓋長頸瓶・甕などがある。

蓋（第９図３）

口縁部の小破片で，直径は計測できない。口縁端部は，わずかにおりまげられているが外方をむいている。

長　頸　瓶

頸部と体部の小破片があるが，全体の形はわからない。

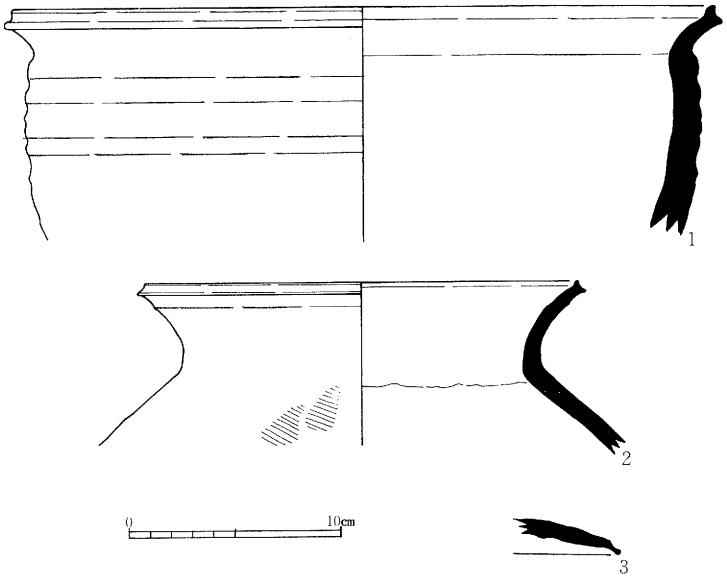
甕Ｉ（第９図２）

Ｂ地点１号窯で，甕IIとしたものに類似する甕である。口径21.2cmの大きさである。口頸部は約５cm位の長さをもち，体部からほぼ直角に折れ曲がって，口縁端部にいたる。口縁端部は，上下をわずかにつまみ出しているだけで単純である。体部は平行叩目があり，

内面は，ロクロナデ痕跡がある。

甕II（第9図 1）

割合大きいもので，口径34cmである。わずかに内湾しつつほぼ垂直に立ちあがる体部上半から，短かく外反する口頸部をもつものである。口縁端部は上・下にわずかにつまみ出されている。内外面ともロクロ調整で叩目はみられない。



第9図　C地点1号窯跡出土須恵器実測図

これらの他は何れも小破片である。口頸部の破片としては，口縁端部の下をやや大き目につまみだしているものの口縁部破片や，波状文をもつ頸部破片がある。他は体部の破片であるが，B地点1号窯と同様，厚手・薄手にわけ更に外面の叩目と内面のあて道具の痕跡によって分類すると次の様になる。薄手のものとしては，1 外面が平行叩目で内面に円弧状文のあるもの，2 外面が平行叩目で内面が平滑なもの，3 外面が格子叩目で内面が平滑なもの，4 外面が格子叩目で，内面が綾杉状文のもの，5 外面が平滑で内面が円弧状文のもの，6 両面平滑なもの，などがあり，厚手のものとしては，1 外面が平行叩目で内面が円弧状文のもの，2 外面が平行叩目で内面が平滑なもの，3 両面共平行状のもの，4 外面が格子叩目で，内面平滑なもの，5 内外面共格子目のもの，6 外面が平滑で内面が格子目文のもの，7 外面が平滑で内面が円弧状文のもの，8 両面共平滑なものなどがある（図版8 g～l）。

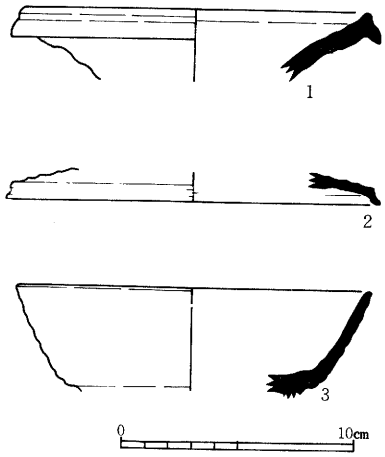
VII　D・E・F・G地点の窯跡群の遺物

1．D地点の遺物

B-1号窯，C-1号窯のある，長根丘陵からわずかに南に張りだした丘陵の西に浅い谷をへだててやや長く南に張りだした丘陵があるが，D地点の窯は，その先端の南斜面にあったものと考えられる。C-1号窯の西約50mにあたる。開田工事のため，既に失われたものと思われる。ここからは甕の破片が数点出土しているのみである。いずれも外面は平行叩目で，内面が円弧状文のあるものである。

2．E地点の遺物

E地点の窯跡や，後に述べるG地点の窯跡は，B-1号窯の面している浅い谷の，更に西側にある南北の浅い谷に面している。E地点は東斜面，G地点は西斜面で，いづれも頂部



第10図　E.F地点の須恵器実測図
1.E地点　2.3F地点

近くである。E地点は，A地点1号窯の西約50mにあたる所である。スサ入りの窯壁が広く散布することからみて1基だけでなく，数基存在する可能性もある。ここからは杯・蓋・長頸瓶・椀或いは鉢，甕などが発見されているが，いずれも小破片である。杯は，口縁部破片，底部破片などがある。底部破片は，回転ヘラ削り再調整がある。蓋は天井部の小破片である。長頸瓶は，口縁部と，高台部の破片である。口縁部は径15cm位で，やや大き目だが，長頸瓶と考えられる。甕は何れも体部の破片である。外面は平行叩目や，格子叩目があり，内面には円弧状文のあるものと，ないものとがある。

3．F地点の遺物

C地点1号窯の東約180mの長根丘陵がわずかに南に張りだしている所の中腹にある。ここからは杯・蓋・長頸瓶・甕などが採集されている。杯は，口縁部，体部，底部などの破片であり，高台のつくものもある。底部には，回転糸切痕をもつものもいくつかある。また，体部下半に手持ちのヘラ削りのある小破片もみられる。蓋は口縁部の小破片である。図示したものの他に，直角に下方に折り曲げられた端部をもつものもある。長頸瓶は，底部小破片，体部小破片があるのみである。甕は，口縁端部下方をわずかにつまみだしている単純な形の口縁部小破片と，外面が平行叩目で，内面に円弧状文のある体部破片が数点ある。

4．G地点の遺物

G地点は先にも述べた様にE地点と同じ谷に面した西斜面の頂部近くにあり，A地点1号窯の西約30mの所である。ここには，杯・甕の破片がある。杯は底部の破片であるが，静止糸切痕がある。底部周縁はロクロの回転を利用しないヘラ削り再調整をしている。甕は体部の小破片であるが，外面には格子叩目があり，内面には，わずかに湾曲する平行文がみられる。

Ⅷ　考　　察

1．出土遺物の編年と考察

ここでは先づ，各窯跡出土須恵器の特徴を概観し，年代的な位置付けをしたい。次に，長根窯跡群の中での編年的な考察を若干行なうことにする。

A地点1号窯の須恵器についてみると，杯Ⅰは，すべて回転ヘラ切りでロクロから切り離し，丁寧な回転ヘラ削りの再調整が体部下半から底部にわたって行なわれる。この削りにより，体部と底部との境界が明瞭な稜をなす。高台が，底部周縁より1cmほど内側に付されるのも杯Ⅰの大きな特徴である。杯Ⅱは蓋とセットになるものと考えられる。杯Ⅲは高台の付かないものであるが，底部がゆるい丸底をなす。盤も外面の体部下半から底部に

かけて丁寧なヘラ削り再調整を行なっている。長頸瓶は，頸部の口縁端部の下に弱い隆線が１条めぐるのが特徴であろう。さらに肩部と胴部の境界には，凹線をめぐらしている。高台は，厚く外方にふんばった端面の水平なものと，さほど厚くなく，端面が外上方をむいた，やはり外方にふんばったものがある。

次にＢ地点１号窯の須恵器で特徴的なものは杯Ｉや蓋である。杯Ｉは，体部と底部の境界が丸味をおび，あまりはっきりしないものであり，底部は，割合大き目である。ロクロからは，ヘラ切りではなされ，再調整は全くない。蓋は，割合大き目で，天井部には，高い宝珠形のつまみがつけられている。

Ｃ地点１号窯からは，特徴のある器形の須恵器は出土していない。甕の形態や，甕体部破片の叩目，あて道具の痕跡などはＢ地点１号窯とほぼ共通する。

Ｄ地点からは甕の破片が数点出土しているのみで特徴は，はっきりしない。

Ｅ地点の須恵器も小破片のみで，さほど特徴はつかめないが，杯底部の破片の中に，回転ヘラ削り再調整をしているものがある。甕の体部の叩目は，Ｂ－１・Ｃ－１などとさして変りがない。

Ｆ地点出土の須恵器には，回転糸切り痕のある杯がみられる。また，Ｇ地点の須恵器の中には，静止糸切りでヘラ削り再調整のある杯底部破片がある。

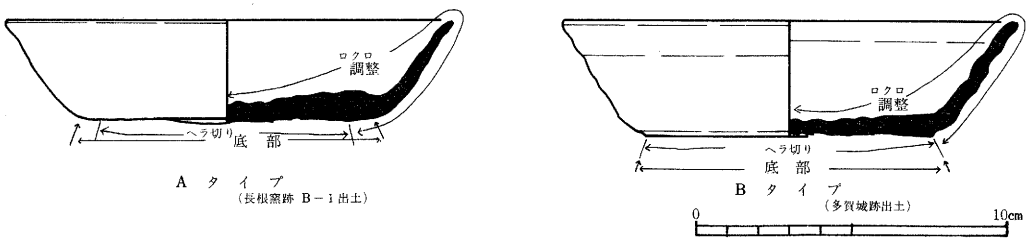
以上各窯跡の須恵器の特徴を略述したが，次に各窯の年代的位置付けを考えてみたい。

Ａ地点１号窯の須恵器については，すでに先の報告で，やや詳しくふれたので，再述は省略する。他地方の出土品と比較すると，陶邑古窯址群のＴＫ 217，ＭＴ21（注１）藤原宮跡の出土品（注２）福島市小倉寺高畑窯跡の出土品に類似し（注３）地方色はほとんど目立たない。ところで陶邑古窯址群の編年では，ＴＫ 217は，第Ⅲ期―宝珠ツマミと高台の出現以後―の型式の内の２番目の型式である。またＭＴ21は，第Ⅳ期―蓋内面のかえりの消失以後―の５型式の内の最初の型式である。そして第Ⅲ期の実年代は，７世紀前半から７世紀後半，第Ⅳ期は７世紀後半から８世紀末に比定されている。さらに藤原宮跡出土のかえりのない蓋，台のある杯のセットは８世紀初頭と考えられており，また福島市小倉寺高畑窯跡の出土品は，偏平な宝珠つまみをもち，内面にかえりのある蓋があることなどから，８世紀前半に位置づけられており，多賀城創建以前の所産と考えられる。

ところで，多賀城，多賀城廃寺の創建の瓦を焼成した宮城県加美郡色麻村日の出山窯跡群Ａ地点で（注４）瓦と伴出した須恵器の内，高台付杯や，長頸瓶は，今回発見されたＡ地点１号窯出土の高台付杯，長頸瓶より新しい様相を呈している。杯の高台の付く位置や，長頸瓶の体部，高台の形に差異が顕著である。

従ってＡ地点１号窯から出土した須恵器は，日の出山Ａ地点のものより古く，むしろ現在知られるかぎり，東北最古と考えられている福島市小倉寺高畑窯跡の出土品に近い。以上のことから，これらの須恵器は，８世紀初頭の所産と考えられる。

Ｂ地点１号窯については，杯に最も著しく年代的な特徴があるかと考えられる。この杯はヘラ切りで再調整のないものである事は先にも述べた。この類の杯の年代的位置付けについては，以前に若干ふれた事があるが（注５），ヘラ切りで再調整のあるものや，静止糸切りの杯より年代の降るものであるが，回転糸切りの杯等よりは勿論古いものである。年代的には，８世紀後半から９世紀前半と考えられる。ところでヘラ切りで再調整のない杯は



第11図　ヘラ切り非再調整の杯の２つのタイプ

２つに大別することができる。Aはこの窯跡から出土した様な，底部と体部との境界がはっきりせず丸味をもちゆるやかな丸底風のものであり，Bは底部と体部の境界が判然としており，平底のものである。この両者の相違点は，ヘラ切りをする部分の，底部に対する大きさにある。つまり，境界の判然としたものBは底部全面がヘラ切りの時にでき上るわけである。それに対して，底部と体部の境界がはっきりしないものAについては，底部の大きさより，ヘラ切りをする範囲は小さいのである。すなわち両者では，ヘラ切りの技術上，やや相違があるわけである。

Aの比較的まとまった出土例としては山形県酒田市明成寺遺跡（注６）がある。この遺跡の出土品にはBは含まれていない。また，Bの出土例としては，多賀城跡で発見される竪穴住居跡の内で，比較的古いと思われるものから多く出土している（注７）。これらの他にも多くの遺跡が知られているし，両者が混在している遺跡もある。

ところで，多賀城跡でBタイプのヘラ切りの杯を出す竪穴住居跡は，多賀城第Ⅲ期（西暦 780年以降 869年迄）に属するものと考えられている。又多賀城第Ⅲ期の瓦を焼いた仙台市原町小田原安養寺下瓦窯跡（注８）からもヘラ切りの杯が出土している。だからBタイプの杯は９世紀前半までは降るものと考えて良い。多賀城ではBタイプの杯につづくものは回転糸切りである。これらのことから，Aタイプの杯は，Bタイプのものより，同じヘラ切りで再調整のないものの内でも，比較的古いものであることが知られる。ヘラ切りで再調整のない杯には，８世紀後半から，９世紀前半位の巾をもつと思われるが，今回B地点１号窯で発見されたものは，その中でも比較的古く，８世紀後半に位置づけられるものと考えられる。

C地点１号窯については，甕体部破片の叩目やあて道具の痕跡などからみて，B地点１号窯とほぼ同年代かと考えられる。D地点に関してはわからない。

次にE地点，F地点，G地点の須恵器について，あわせて年代観を述べたい。E地点では，杯底部に回転ヘラ削りのあるものが認められ，F地点では，回転糸切の杯が採集された。また，G地点では，静止糸切の杯が出土している。これらと同類の杯については，以前に若干年代観を述べた事がある（注９）。回転ヘラ削りのある平底の杯は，８世紀前半に位置づけられ，静止糸切りの杯は，日の出山窯跡群A地点で多賀城創建の瓦と共伴したので，８世紀前半である事が判明している。又回転糸切の杯については，一般に９世紀以降と考えられている。

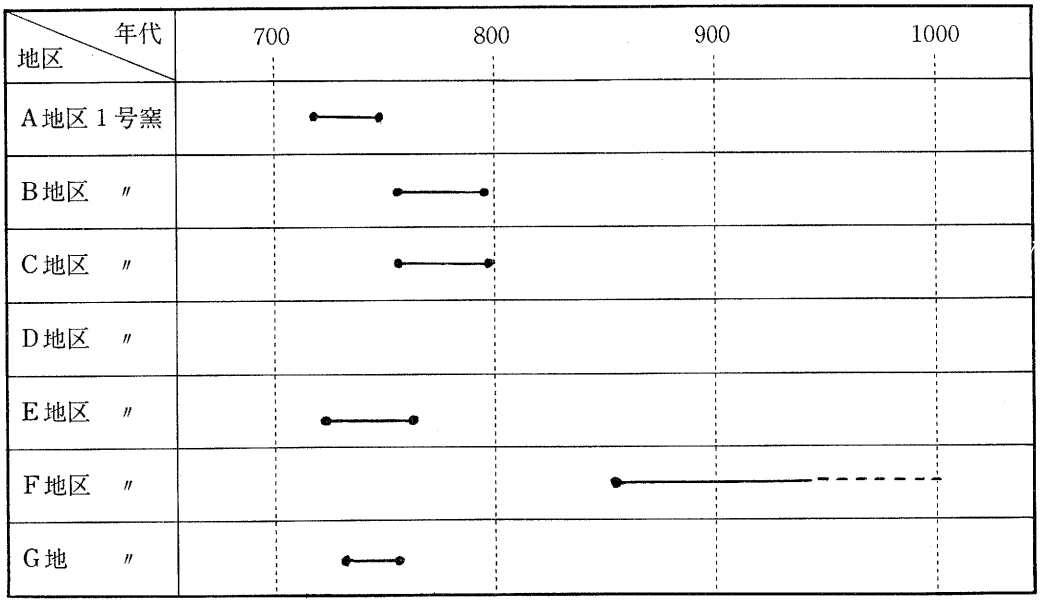
ところで，仙台市台の原窯跡群でも，静止糸切りの杯や，回転ヘラ削りの杯は採集されている（注10）。現時点では，台の原窯跡群の生産開始時期は，陸奥国分寺の創建に伴うものと考えられている（注11）。そう考えると，これらの杯は８世紀半頃まで，作られていた

という事がわかる。また，福島県伊達郡国見町の大木戸窯跡では，１つの窯跡に上・下２層の床面が認められ，上層からは，回転ヘラ削りの杯が，下層からは，静止糸切りの杯が出土している（注12)。

これらのことから，Ｅ地点の年代はＡ地点よりは新しく８世紀の前半から半頃，Ｇ地点の年代は，Ｅ地点の年代に含まれる８世紀前半と考えられる。いづれも年代に巾が考えられ，細かく限定することは不可能である。勿論Ｂ・Ｃ両地点よりは古いと思われる。Ｆ地点はＢ地点より新しく，９世紀半以降とみなして良かろう（注13)。

この度発掘を行ったＢ・Ｃ両地点以外のＤ～Ｇ地点については，表面採集資料であり，各地点毎に窯跡が数基存在する事も考えられる。以上に記した各地点の年代観は，あくまでも現段階での見通しであり，断定する事はできない。

これまで述べた年代観をもとに，各地点の操業時期をあらわすと下の表の様になる。つまり，長根窯跡群は，８世紀初頭に須恵器生産を開始し，10世紀以降にいたるまでほぼ連続的に，須恵器専用の窯場として存在した事が判明したわけである。



注１　田辺昭三『陶邑古窯址群Ｉ』（平安学園）1966

注２　『藤原宮』（奈良県教育委員会）1969

注３　工藤雅樹「福島市小倉寺高畑遺跡発掘調査報告」(『福島市の文化財，福島市文化財調査報告書第７集』福島市教育委員会）1969

注４　岡田茂弘，工藤雅樹，桑原滋郎，佐々木茂楨，進藤秋輝『宮城県文化財調査報告書第22集日の出山窯跡群』（宮城県教育委員会）1970

注５　『多賀城跡調査報告Ｉ―多賀城廃寺跡』（宮城県教育委員会，多賀城町）1970の第５章遺物３土器類で，桑原が若干述べている。

注６　酒田市教育委員会保管。佐藤禎宏「酒田市明成寺遺跡」(『庄内考古学第11号』庄内考古学研究会）1972

注７　『宮城県多賀城跡調査研究所年報1971多賀城跡』（宮城県教育委員会，宮城県多賀城跡調査研究所）1972

注８　『一略報―安養寺下瓦窯址』（古窯跡研究会）1972

注９　注４・５に同じ。

注10　加藤孝，野崎準「台の原，小田原窯跡群の古窯跡分布とその問題点」(『東北学院大学，東北文化研究所紀要第４号』)1972，65頁図版６

注11　こういった窯の生産開始時期が陸奥国分寺創建よりさかのぼる可能性は皆無とはいえない。ただ，これらの須恵器は瓦と共に採集されていることから，一応国分寺創建以降と考えておく。

注12　桑原滋郎「福島県国見町大木戸窯跡の調査」(『東北史学会1972年度大会プログラム』)1972

注13　多賀城第Ⅳ期(貞観11年 869年以降)の瓦を焼いた小田原安養寺中囲瓦窯跡からは，回転糸切りの杯が出土している。『東北学院大学東北文化研究所考古学研究資料目録第１冊宮城県仙台市原町小田原字安養寺中囲瓦窯址群出土目録』（東北学院大学東北文化研究所）1968

２．長根窯跡群をめぐる諸問題

以上で調査の概略を終えるが，最後に本窯跡群をめぐる諸問題について考えてみたい。

まず長根窯跡群の特色の第１点にあげていいのは，窯の構造と生産品である。Ａ～Ｃ地点の発掘調査によって，これら３地点に共通する窯の構造として半地下式のあな窯であることが明らかになった。しかも須恵器だけを専用に生産している（注)。

このことは，多賀城創建期の瓦を製作するために同じ宮城県北地方に築かれた窯跡群の構造が，加美郡色麻村日の出山窯跡群にせよ遠田郡田尻町木戸窯跡群にせよ，地下式であり，かつ瓦と一緒に須恵器を生産しているのに比較すると，著しい相違点ということができる。

これらをもってすれば，宮城県北部地方の須恵器の生産に，半地下式窯による専用生産と地下式窯による瓦との併用生産の２系統があったことを指摘しなければならない。かくして，長根窯跡は今後の東北窯業史の研究上に１つの基準を与えるであろう。

つぎに，長根窯跡群は，これまでのべてきたように，８世紀初頭には生産が開始されたことである。Ａ－１号窯跡がそれであり，この窯跡から出土した須恵器は，８世紀の30年代頃の構築と考えられている日の出山窯跡群Ａ地点のものよりは明らかに古く，むしろ現在知られているかぎり，東北最古と考えられる福島市小倉寺高畑窯跡の出土品に近い。さらに，長根窯跡群Ａ－１号窯跡の須恵器は，前述のように畿内の陶邑古窯址群や藤原宮跡の出土品に近い地方色のほとんど目立たないものである。

これらの事実は，多賀城創建以前に，非常に中央的な須恵器製作の技法が，窯とともに長根丘陵に伝播してきていることを物語るものとみとめられる。多賀城の北方約40km，令制の小田郡域のしかも北端部に近い長根の丘陵で，かかる畿内的色彩の濃い本格的な土器生産がはじまっていることは，大いに注目しなければならない。土器の製作に，この地域の平穏な状態をその時期に想定するのであるが，その前提としての建郡も，小田郡の国史上の初見である天平21年(749）をはるかに溯って考えてよいだろう。

しかし，長根丘陵上に分布する他の窯跡の須恵器をみると，そこにはA地点にみられた畿内的な技法はうかがえない。むしろA地点以外の須恵器は全く地方的なものでしかない。従って，長根丘陵上への中央文化の伝播は，以後も継続したとはみなしがたいのである。

最後に，長根窯跡群の製品の供給先の問題である。前回の報告書『長根窯跡』においては，A－1号窯跡出土の長頸瓶が宮城県岩沼市長谷寺横穴出土のそれに酷似しており，当窯の製品である可能性を考えて注記しておいた。本窯跡群の性格が郡の窯であったのか，それとも小田郡域を越えた範囲に製品を供給する窯であったのかの問題は，供給関係を洗うことによっておのずから明らかになるものと考えるので，今後，各地の遺跡の出土品に対する検討と資料の増加とをまつと共に，長根窯跡群の継続した研究が必要であろう。

E地点やF地点の場合には，時期の異なる各種の土器があり，窯壁の遺存も顕著であるし，G地点も注意すべきものがある。これらの地点は長根窯跡群全体の性格を把握するために，将来是非とも調査する必要があると考えている。

注　長根窯跡A地点よりは時期が新しいが，同じく8世紀に繰業が開始された窯として，宮城県黒川郡大和町鳥屋古窯跡をあげることができる。これも須恵器専用の窯跡である。
『宮城県黒川郡大和町鳥屋古窯址出土品目録』（東北学院大学東北文化研究所）1968

末筆ながら，本報告をなすにあたり，遺物の整理，分類に関して，進藤秋輝氏の御教示を得た。又図面作成については，高野芳宏氏の御協力を得た。さらに，遺物の復原等に恵美昌之氏，後藤祥子氏をわずらわせた。記して感謝の意を表する次第である。

図版１　長根窯跡群付近航空写真

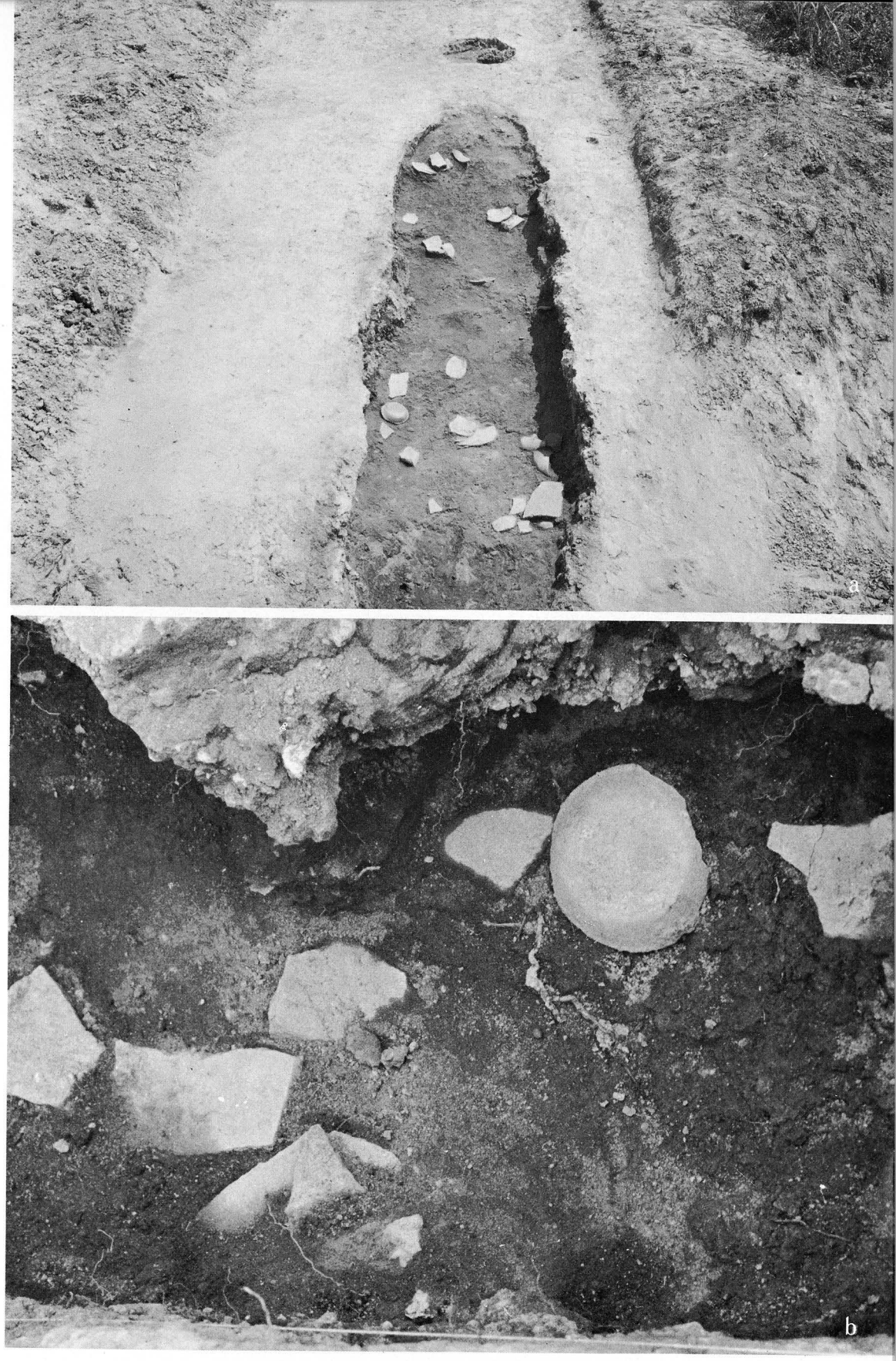
承認番号　昭47　6592号　ＴＯ－72－６×　Ｇ４－21

図版２

a．長根窯跡群遠景

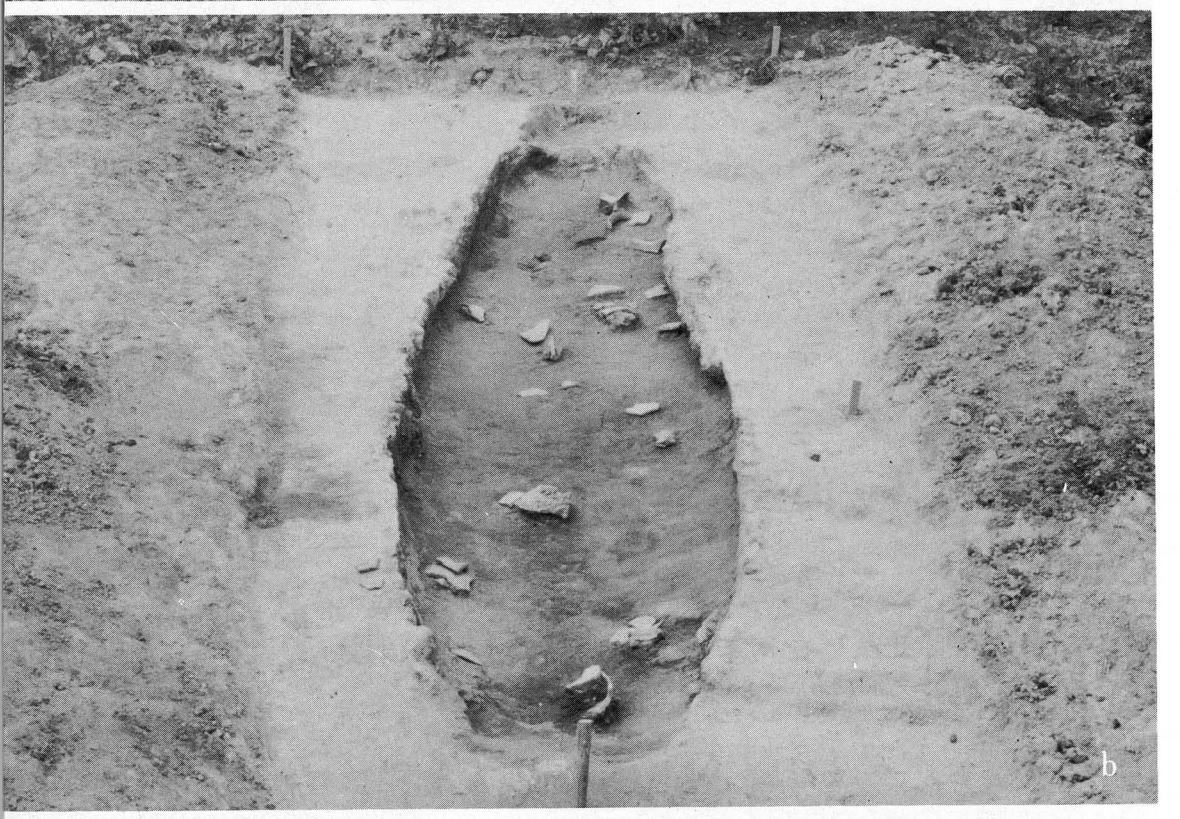
b．発掘地区全景

c．Ａ地点１号窯跡



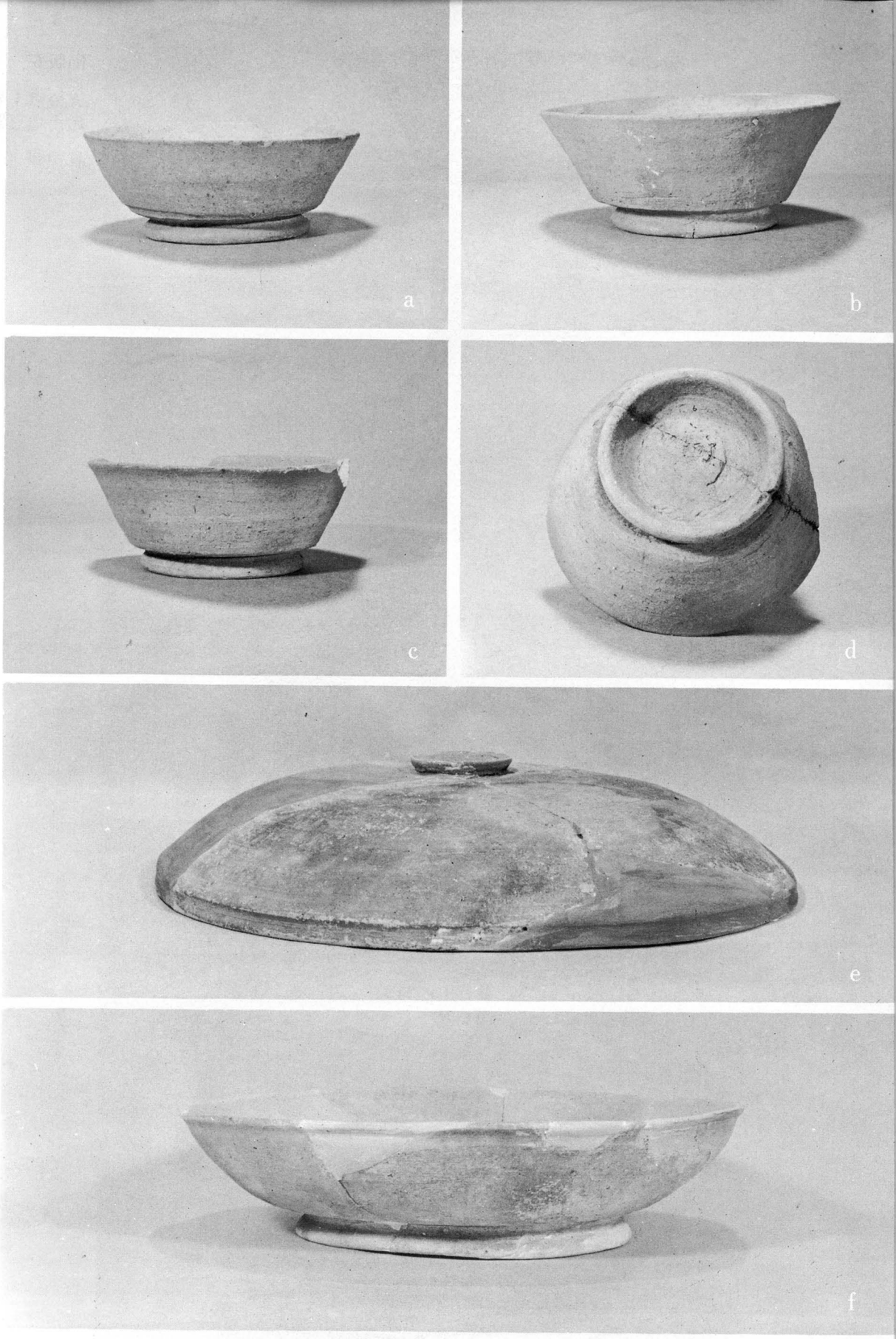
図版３　a　B地点１号窯跡

b　須恵器出土状況



図版4　a　C地点1号窯跡

b　須恵器出土状況

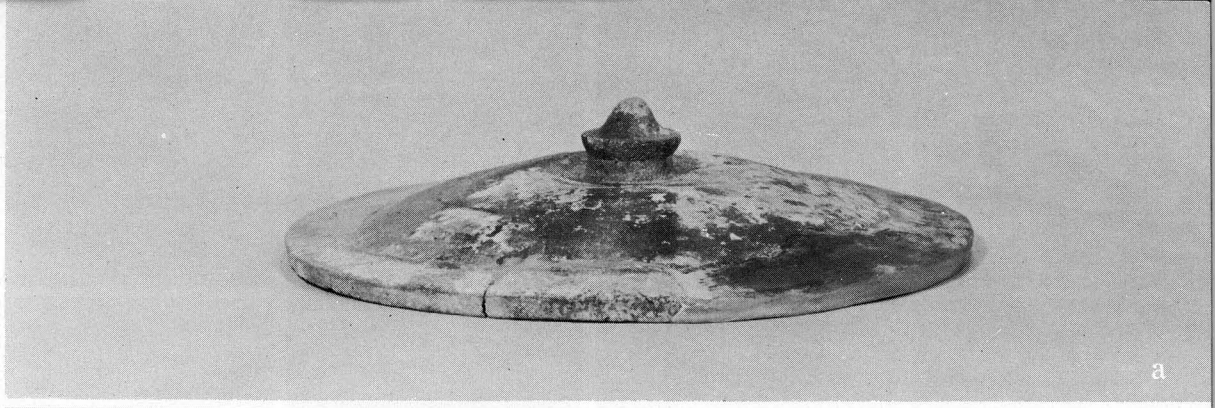


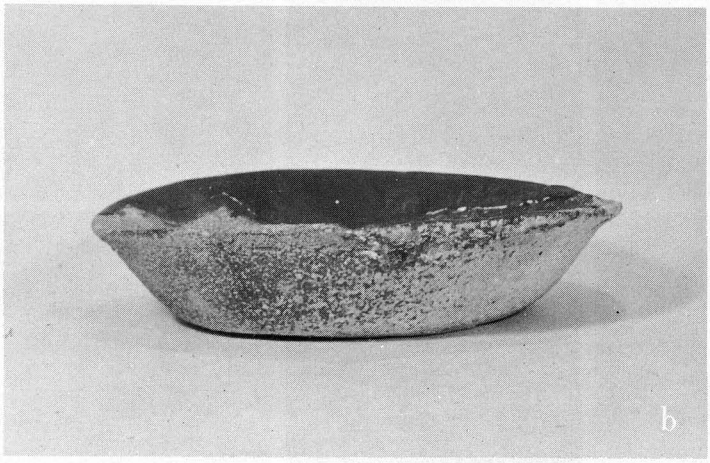
図版５　A地点１号窯跡出土須恵器　a～d杯I　e蓋　f杯II

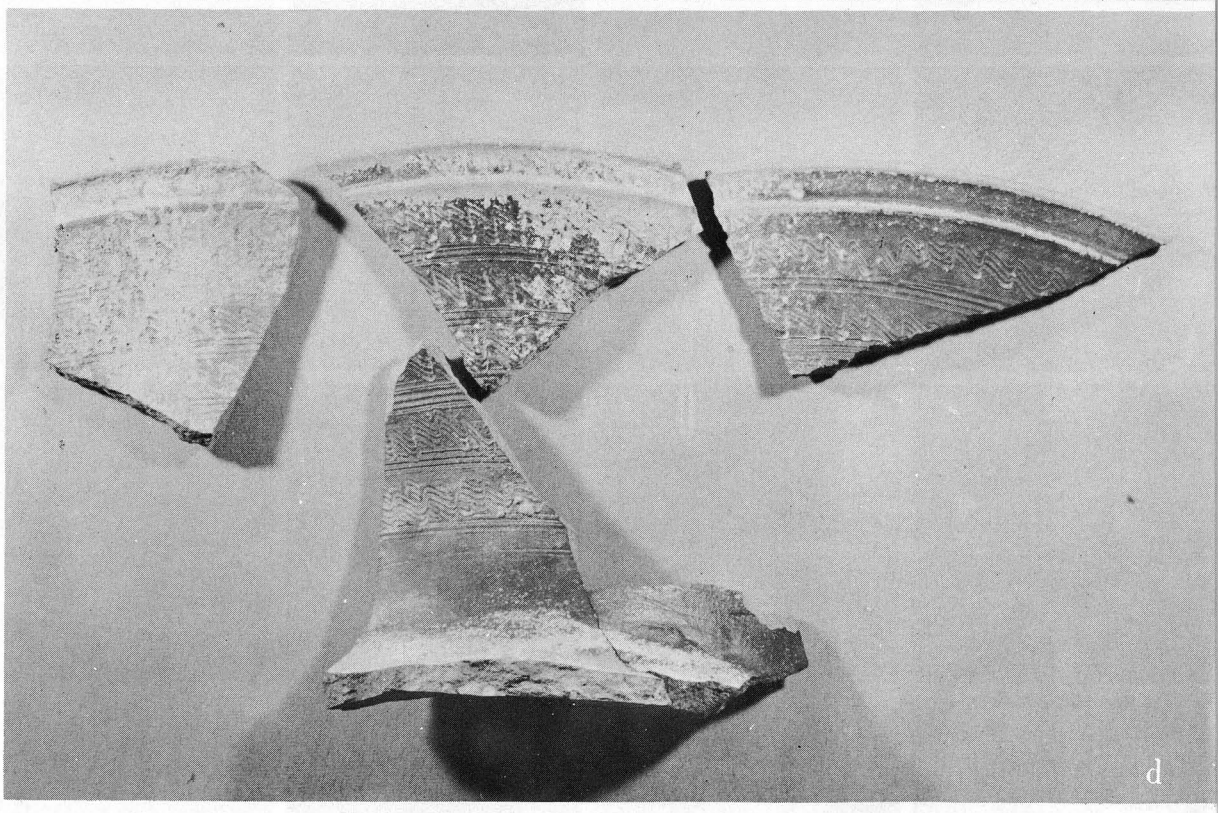
図版 6

A地点1号窯跡
出土須恵器

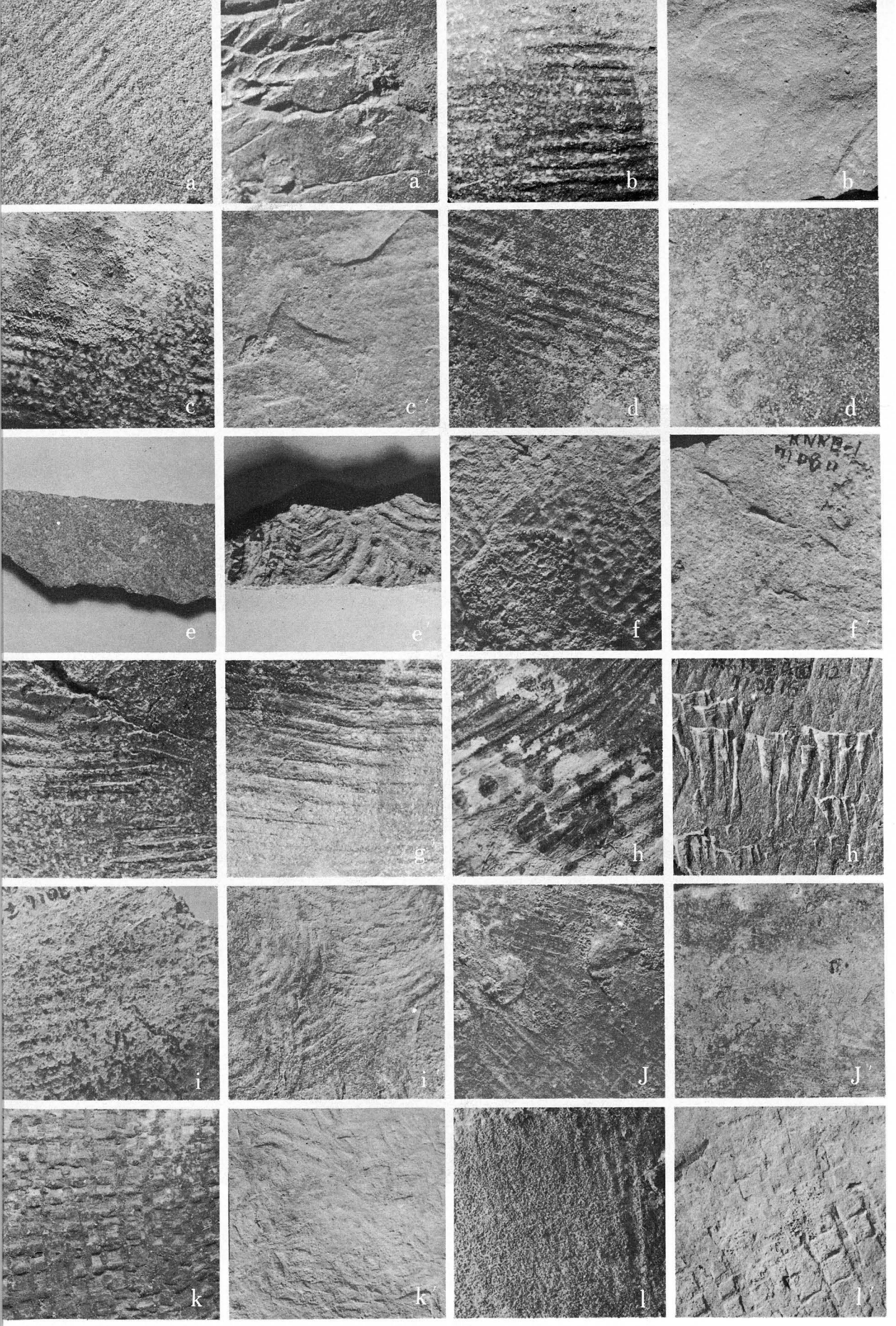
長頸瓶







図版７　Ｂ地点１号窯跡出土須恵器
ａ．蓋　ｂ．ｃ．杯Ⅰ
ｄ．甕Ⅰ



図版８　甕叩目 a ～ f′　B地点１号窯跡出土　g ～ l′　C地点１号窯跡出土

昭和47年３月20日印刷
昭和47年３月31日発行

発行者　涌谷町教育委員会
宮城県遠田郡
涌谷町字新町裏153の2
印刷者　小泉印刷株式会社